

周作人訳『枕草子』の経緯と実態

——「未出版」を中心に——

張 培 華

要 旨

中国現代名人である魯迅の本名は周樹人（一八八一～一九三六）である。周作人（一八八五～一九六七）は魯迅の弟である。本稿では、周氏兄弟の関係から、周作人が日本古典文学を翻訳するまでの経緯を述べ、特に人民文学出版社から一九五九年に依頼された『枕草子』の翻訳は、周作人が一九六一年に完訳したにも拘らず、なぜ当時出版しなかったのか。この点について、近年公開された周作人の日記や友人の手紙から、その原因と理由及び実態を考察してみたい。

一 はじめに

世界文化名人である魯迅の本名は周樹人である。周作人は周樹人の弟である。二人とも日本での留学経験があり、中国に帰国後のそれぞれの優れた業績から見ると、ともに中国現代文化を建設した名人と言えるだろう。時に二人とも日本文学の翻訳や紹介した業績も著しい。また兄魯迅より周作人の方が多くの日本古典文学を翻訳されたということに注目したい。いつ、どんな状態の中で、周作人は日本古典文学を翻訳することができたのか。また、一九五九年、人民文学出版社から周作人に依頼した翻訳は、日本古典文学大系『枕草子』であったが、出版されなかった。周知のように、日本古典文学大系『枕草子』の底本は三卷本系統本である。周作人が一九六一年に完訳した『枕草子』は明らかに能因本系統本、つまり池田亀鑑が校正した岩波文庫版の北村季吟『春曙抄』である。このことが「未出版」の原因ではないだろうか。この点について、近年、公開された周作人の日記や友人の書簡などの新しい資料によって、当時の周作人の翻訳の実態と生活状況を改めて考察したい。

二 周作人と魯迅及び「周恩来」への手紙

魯迅（周樹人）が中国の浙江省の紹興府に生まれた四年後、一八八五年一月十六日、周作人が誕生した。

周樹人は、一九〇二年三月二十四日、故郷を離れ、南京で船に乗り上海を経由、四月四日、横浜に到着、日本での留学を始めた。四年後、一九〇六年、夏から秋にかけて、周樹人は母親の命で帰省、朱安女士と完婚した。同年、周

作人は兄周樹人に同行して日本での留学を始めた。

一九〇九年三月、周氏兄弟（周樹人と周作人）は合訳した『域外小説集』の第一冊を出版した。同年七月、第二冊を出版した。⁽¹⁾ 同年八月、周樹人は中国に帰国。周作人は日本人の女性と結婚、日本に残った。一九一一年五月、周樹人は、日本に訪れ周作人夫婦に中国に帰国を促した。同年十月、周作人は日本人の妻を連れて、故郷の浙江省の紹興府で暮らし始めた。⁽²⁾

一方、周樹人は、一九一二年、当時の中国教育部の僉事に任命され、社会教育司第一科科长にも任命された。さらに一九一五年、周樹人は、教育部に支配する通俗教育研究会の小説股主任に任命された。⁽³⁾

一九一八年、三十八歳の周樹人は、初めて「鲁迅」のペンネームで、『新青年』雑誌第四卷第五号に『狂人日記』を発表した。

鲁迅の紹介により、周作人は北京大学の教職を得た。

一九一九年、鲁迅は、故郷へ帰り、母親と紹興から北京の八道湾に引っ越した。周作人夫婦も八道湾で鲁迅と一緒に暮らしていた。⁽⁴⁾

一九二〇年、鲁迅は北京大学と北京高等師範学校に講師と招聘されていた。一方、周作人は、八道湾の周氏自宅に「新しい村」北京支部を設立した。日本の「新しい村」の作家達と直接連絡をとっていた。

一九二三年六月、再び周氏兄弟は各自の翻訳を合わせて、『現代日本小説集』を出版した。これは鲁迅と周作人の最後の合作である。翌月、七月、歴史的な事件が発生した。何らかの原因で、未だに謎のままとする周氏兄弟の関係の破綻である。七月十八日、周作人は鲁迅に絶交の手紙を渡した。⁽⁵⁾ 八月二日、鲁迅が八道湾十一号から磚塔胡同六十一号に遷居した。⁽⁶⁾

周知の如く、魯迅と周作人の兄弟の關係は破綻したが、二人の理想と思想が異なっても、ともに中国現代文化を貢獻した数少ない巨人と言えるだろう。周氏兄弟の評価について、伊藤徳也は次のように述べている。

魯迅・周作人の兄弟はいずれも近代中国の文学史上重要な地位を占める作家だ。魯迅がその死後も長く、また中国国外にまで影響を及ぼした巨大な存在であり続けていることは言うまでもない。周作人も一九一〇年代後半から三〇年代にかけての中国語文壇においては極めて大きな影響力を持っていた。彼らはいずれも日本留学経験があり、日本語文壇とも深い關係をとり結んだ。特に周作人は、日本の文化と学芸を中国語文壇に幅広く積極的に紹介した。魯迅も弟ほどではないものの、日本語テキストを中国語に翻訳し、しばしば日本にも言及した。⁽⁷⁾

確かに、翻訳された日本文学の作品から見ると、魯迅より周作人の方が日本古典文学の方が多い。この時期、周作人は既に『古事記』を翻訳して『語絲』雑誌に連載していた。初めて『枕草子』を紹介したのは、一九二三年二月十一日『晨报附刊』に開設した「雑感」のコラムで掲載した「緑洲 五「歌咏兒童的文学」」である。周作人は、十数年前に買った竹久夢二の挿絵を見て、日本も中国も児童文学が西洋文学より乏しい状況に賛同し、また中国より日本の多くの文学ジャンルの中にも児童文学が見える。例えば、十世紀の末の清少納言「枕之草子」の隨筆であり、例として、文章の後半で、『枕草子』「うつくしきもの」の章段を訳して掲載したのである。⁽⁸⁾この文章は、清少納言と『枕草子』を中国に伝えた早い文献である。

実際に、二年前の周作人が、古典文学の翻訳について、当時の革新的な文学雑誌『小説月報』編集部に提案を送った。ところが『小説月報』の責任の編集者である沈雁冰（茅盾）から周作人への返信は、古典文学の編集について、人手が足りないとのことだった。

而且古典文学的介绍，所需时日人力，定比介绍近代文学为多，先生所说现在人手不够，这是我们现在实在的情况⁽⁹⁾

(さらに、古典文学の紹介には、現代文学の紹介よりももっと時間と人手が必要であり、ご察知のように今、十分な人がいない現状である。)

このように、周作人は日本古典文学に力を入れて普及することに挫折した。当時の社会では、外国の古典文学はあまり重視されていなかった。『語絲』に長く連載していた『古事記』も単行本にならないのが現実であった。

一九三六年十月、魯迅と破綻してから十数年経って、周作人は、亡くなった兄周樹人に関する「魯迅について」を『宇宙風』雑誌に原稿を寄せた。まもなく日中戦争が始まった。周作人の運命を強く揺さぶった。一九三八年五月、『新華日報』に「文化界から周作人を追放せよ」と掲載された。『抗戦文芸』第一卷四期に茅盾（沈雁冰）、郁達夫、老舍ら十八名の当時の文化名人たちが連名して、「周作人に与える公開書簡」が発表された。⁽¹⁰⁾一九三九年、周作人は大学の教職を辞めた。一九四一年、当時の偽華北政務委員会から偽国民政府の委任状を受け取った。一九四五年、「漢奸罪」で国民政府に逮捕。一九四六年、南京へ押送され、老虎橋監獄に収監された。一九四九年一月、南京の老虎橋監獄から保釈、その後、上海の尤炳圻の家に寄寓していた。⁽¹¹⁾

一九四九年十月一日、中華人民共和国が成立する直前、周作人は、長さ六千字くらいの手紙を、中国共産党の要人（周恩来）に寄せた。ここで六千字の手紙を全部引用することは長すぎる為、周作人の意思を知るために、一部代表的な段落を取り上げておきたい。

□□先生

この書状を差しあげるまでには、ずいぶんためりました。昔ならば身のほど知らずというところでしょうし、

以前新聞記者連の常用した調子で言えば、ここに申しあげるのは、胡麻ごまを播まるような、手柄顔をするような、口に出せばあまり聞きよくはないことばかりですから。しかしそれにもかかわらず、私は一通りの考慮のち、書くことに決めました。すでに時代は変わって、是非の基準も移った以上、私どもが誠実にありのままを述べるかぎり、人民政府、言いかえれば自分の政府に向かって、申し立てをすることに何の不都合があろう、かつて臣民の立場で独裁政府にもの言ったのとは全くちがうのだ、とこのように考えて、新民主主義に対する卑見ならびに一身にかかわる事情を、書状でご説明する決心に及んだわけであります。

私は社会科学を勉強していないため。共產主義の科学的精義を心得るには程遠ものの、ありふれた文献をいくらか齧って、従来の歴史がみな階級闘争の歴史であり、歴代の道徳や法律が当時の特権階級の利益を代表するものだったということは、信じます。私には専門の学問というものはなく、文学などでも結局はよくわからず、早々と足を洗ってしまいました。いまだに興味を繋いでいるのはギリシャ神話、童話童謡、および民俗といったような方面で、ここには婦人と児童の問題が絡んできますが、それともかなり関心のあるところです。（中略）中国共産党の理論と実際については、私どもは国民党政府の下で多くを知らず、ただ毛主席の二、三の著作や米人スノウ [Edgar Snow] などの本で幾らか読んだにすぎません。しかし今年、天津北京に続いて南京上海も解放されるに及び、ようやく直接の見聞によつて確かなところがわかりました。私どもは共產主義の理論の正しいことは知っていました、それ以上に知りたかったのは事実は何何ということ。天下周知の解放軍の規律の素晴らしさも、率直なところ当然といえば当然で、それ以上に重要なのは政治のやり方如何ということ、このほうが一般の人々にはより切実な関心事です。（中略）

私は政治や経済に暗いので、こんな浅はかなことしか申せませんが、申したのは本当のことです。自

分の思うところを明らかにしたいばかりに、ためらいを捨てて書いたのです。もともと、私如きまでがこんなことを喋りだすのか、と人は言うかもしれません。それももつともな批判ではあらうと思います。なにしろ、私自分が関していささかの説明をせねばならぬと思い立ったのは、私の一連の思想と行為には、先生でも首をかしげられるふしがあるうかと慮つてのことなのですから。人は私を批判して、抗戦以前には有閑消極を言い、戦後には通敵協力を言います。自分にかかわることは、自ら厳しく批判して率直に誤りを認めるのが筋というものでしょうが、それを承知のうえでお、私はまず事実の因つて来るところから申し述べねばなりません。それが多少は弁解めいて見えようとも、あくまで誠実に語るのであつて、決して強弁を弄するものではありません。その中で明らかになるであらう過ちはすべて認めます。(中略)

できるかぎり簡単に記すつもりが、ずいぶんくだくだしくなりました。時に説明が過ぎたとしても、またやむをえぬところとご諒察下さい。かつての思想上のひねくれようや行動面の誤りは自身承知ですが、それらにもかかわらず、私の真意と真相は先生にもご理解いただけたようかと存じ、本状を認めた次第です。本来は毛(沢東)先生に宛てることも考えましたが、多忙な彼をお騒がせするのを憚つて、先生に代表をお願いすることにしました。

民国三十八年(一九四九)七月四日

周作人⁽¹²⁾

冒頭「先生」の宛名に具体的な名前は書いてないが、周恩来と考えていたのは、木山英雄によつて、一九八七年第五期『魯迅研究動態』に掲載された唐弢の「周作人に関して」の記事と考えられる。例えば、その記事には、次のような経緯が見える。引用文は『周作人「対日協力」の顛末補注『北京苦住庵記』ならびに後日編』(岩波書店)による。

一九五〇年だったかに、中央が全国文物工作会議を招集し、私は華東から北京へ出向いた。文物局長の鄭振鐸や文化部長の沈雁冰^{しんがんひょう}（茅盾）たちが、ちょうど政務院総理周恩來のところから周作人が彼に送った手紙を持ってきていて、六千字近い長大なそれは周の親筆であつた（図を見よ）。総理が文学研究会（新文学初期の結社、周・鄭・沈とともに創立同人）の数人の同人に渡して意見を求めたもので、私は西諦^{せいいてい}（鄭振鐸）から読ませてもらった。手紙の書き出す宛名は特に格を上げぬまま「××先生」とだけあり……

（四〇六頁）

木山英雄の分析によると、書き出す宛名は最初から空格のままだったが、「直接には周恩來を相手に書いているものの、本当の宛先は毛沢東と彼が率いる共産党にあることを、形式の上でも表明しているわけであろう。」（前書同）そして、周作人の手紙の効用は、少なくとも毛沢東の次のような指示を得ただろう。引用文は、前書同の唐弢の記事である。

私は文学研究会の老同人たちが当時どんな意見を具申したのかは知らないけれども、周総理から聞いた話だと、毛主席は「文化漢奸さ、放火だ殺人だといったわけのもんじゃない。今どき古代ギリシャ語のできる人間は滅多にいないので、生かすことにして、翻訳仕事をやらせ、あとで出版したらいい」と言ったそうだ。おそらくこれが、人民文学出版社から月々二百元（のちに四百元になった）支給されるようになったことの根拠なのであろう。

（四〇七頁）

以上のように、中国共産党中央宣伝部の周揚や胡喬木が文化部の鄭振鐸に指示して、周作人は、翻訳家として国の事業を進行していた。一九五一年三月、中華人民共和国の文化部に属する人民文学出版社が創立した。また胡喬木は

人民文学出版社の副社長樓適夷に指示して、特に周作人の翻訳はギリシア語と日本古典文学の翻訳を中心とした。党中央の政府の決定は、周作人にとっていっそう強く晩年の抱負を実現したのである。

ところが、日本古典文学としての『枕草子』の翻訳については、すぐに出版されなかった。その原因と理由については、次の節に考察してゆく。

三 問題の所在…周作人訳『枕草子』と「未出版」

人民文学出版社が、周作人に『枕草子』翻訳を依頼したのは、一九五九年である。この点から見ると、周作人が『枕草子』を翻訳した当時、すでに七十歳を超えていたにもかかわらず、多くの日本古典文学を翻訳、出版された。簡単にまとめてみると、一九五九年前後、周作人と人民文学出版社の契約と出版は、次のようになる。

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 一九五五年四月 | 人民文学出版社『日本狂言選』出版。 |
| 一九五六年十一月 | 人民文学出版社『魯迅の故家』出版。 |
| 一九五七年九月 | 人民文学出版社『魯迅の故家』再版。 |
| 一九五八年一月 | 人民文学出版社『古事記』翻訳決定。 |
| 一九五九年一月 | 人民文学出版社『枕草子』翻訳決定。 |
| 一九六一年一月 | 周作人訳『枕草子』人民文学出版社提出 |
| 一九六二年一月 | 人民文学出版社『石川啄木詩歌集』出版。 |
| 一九六三年二月 | 人民文学出版社『古事記』 ⁽¹³⁾ 出版。 |

右に注目したいことは、太字の『枕草子』である。つまり問題は、一九五九年一月に、人民文学出版社と周作人は『枕草子』の翻訳を決定したが、出版は見えない。周作人が一九六一年に完訳『枕草子』原稿を人民文学出版社に提出したが、出版されなかった。しかも『枕草子』の後に、また一九六二年一月、『石川啄木詩歌集』出版、一九六三年二月、『古事記』出版。『枕草子』は何か問題があったのか。一九六四年、周作人本人が作った自らの年譜と著訳リストの中で、特に『枕草子』の「未出版」について、次のような記録が残されている。引用文の表記は日本語の漢字に直した。

解放後訳著書目

古事記 日本安萬侶原著 一九六三年人民文学社出版。

枕草子 日本清少納言原著 已交稿未出版。

石川啄木詩歌集 一九六二年人民文学社出版。

一九六四年七月三日 知堂⁽¹⁴⁾

右のように、一九六二年と一九六三年の間、一九六一年一月に完訳した『枕草子』は原稿を提出したのに、なぜ出版されてこなかったのか。いったいどのような原因があるのか。前払い翻訳の原稿料を受けた周作人には、『枕草子』の翻訳に関して何かの問題があったのか。これらの疑問を究明してみたい。その前にまず解明したいことは、周作人が翻訳した『枕草子』の底本の問題である。節を変えて詳しく分析する。

四 周作人訳『枕草子』の底本と出版

周作人が翻訳した『枕草子』の底本は、どのようなものなのか。この問題を考察する。

周作人が翻訳した『枕草子』がやっと出版されたのは、一九八八年である。出版社は、かつて周作人の翻訳を依頼した同じ人民文学出版社である。ところが、それは『枕草子』の単行本ではなく、『日本古代随筆選』のうちの前半部分である。『日本古代随筆選』（人民文学出版社 一九八八）には、二つの翻訳書がある。前半の部分は、周作人が翻訳した『枕草子』であり、後半の部分は、王以鏐が翻訳した『徒然草』である。また王以鏐の「訳本序」によると、『日本古代随筆選』の出版は、他の書物と同じように、「日中平和友好条約」を締結した十周年の記念のために、日本国際交流基金を受けた出版物である。

ここで注意しなければならないことは、二〇〇一年、中国对外翻訳出版社が、初めて出版した周作人訳『枕草子』の単行本である。この単行本の『枕草子』は、『日本古代随筆選』の前半の部分である『枕草子』と同じ周作人が翻訳したものが、本文の構成は異なる。例えば、『日本古代随筆選』の中の『枕草子』の訳文と注釈の配列は、毎頁の下に、当該する注釈を順番に付けている。しかし、単行本の訳文と注釈の配列は、毎巻の巻末に注釈する順番である。しかも違うことはこれだけではなく、根本的に異なることは、周作人が書いた「清少納言について」の文章の中の『枕草子』の底本が違うということである。それぞれの原文は次のように引用しておきたい。冒頭文にAとBを付けた。中国語の原文を引用したが、日本語の意味は「（）」に付けた。

A 《日本古代随筆選》周作人译《枕草子》（人民文学出版社一九八八）

关于清少纳言

至于本书的译文系依据池田龟鉴、岸上慎二、秋山虔的校注本……

《日本古代随筆選》周作人訳『枕草子』（人民文学出版社 一九八八）

清少納言について

本書の訳文については池田亀鑑、岸上慎二、秋山虔の校注本に基づいた……）

周作人

一九六五年十月

（三三〇頁）

B 周作人译《枕草子》（中国对外翻译出版公司二〇〇一）

关于清少纳言

至于本书的译文系依照北村季吟的《春曙抄》的底本……

（周作人訳『枕草子』（中国对外翻译出版公司 二〇〇一）

清少納言について

本書の訳文については北村季吟の『春曙抄』の底本に基づいた……）

周启明

（四五七頁）

右のAとBを比べてみると、AとBの底本は違う。Aの底本は、太字に示した通りに、「池田亀鑑、岸上慎二、秋山虔の校注本」である。つまり、日本古典文学大系『枕草子』である。Bの底本は、「北村季吟の『春曙抄』の底本」である。またAとBの作者の署名は違う。Aは「周作人」であるが、Bは「周启明」である。さらに注意したいことは、年次の表記ということである。Aは「一九六五年十月」と明記しているが、Bは年次が見えない。なぜ違うのか。周作人が翻訳した『枕草子』の底本の真相を究明しなければならない。

まず確認したいことは底本と訳文の全章段数である。Aの明記した日本古典文学大系『枕草子』は全章段数は

「三一九」段である。しかし、Aの『日本古代随筆選』の周作人訳『枕草子』の全章段数は「三〇五」段である。また、Bの周作人訳『枕草子』の全章段数も「三〇五」段である。段数の内容を照合してみると、AとBが一致していることから、実にAとBの底本は同じと考える。

そしてBの底本に示したように、「北村季吟的『春曙抄』的底本」に従って、考察した結果、周作人が依頼した『枕草子』の底本は、北村季吟の『春曙抄』ではなく、総合段数の「三〇五」段から見ると、実に周作人が依頼した段数と翻訳した底本は池田亀鑑の校訂した『枕草子（春曙抄）』（岩波文庫〈上巻 742-743〉、〈中巻 744-745〉、〈下巻 746-747〉）である。両方の段数を合わせてみると、次のように明白である。

池田亀鑑校訂『枕草子（春曙抄）』 AとB周作人訳『枕草子』

巻数	段数	巻数	段数
巻一	一〜二〇	巻一	第一段〜第二〇段
巻二	二一〜三四	巻二	第二一段〜第三四段
巻三	三五〜六二	巻三	第三五段〜第六二段
巻四	六三〜七六	巻四	第六三段〜第七六段
巻五	七七〜九一	巻五	第七七段〜第九一段
巻六	九二〜一一〇	巻六	第九二段〜第一一〇段
巻七	一一一〜一三三	巻七	第一一段〜第一三三段
巻八	一三四〜一六二	巻八	第一三四段〜第一六二段
巻九	一六三〜二〇三	巻九	第一六三段〜第二〇三段

卷十 二〇四〜二四一

卷十 第二〇四段〜第二四一段

卷十一 二四二〜二六六

卷十一 第二四二段〜第二六六段

卷十二 二六七〜三〇五

卷十二 第二六七段〜第三〇五段

周作人本人は池田亀鑑校訂の事を明示していないが、この章段数と内容を比べてみれば、明らかに周作人の翻訳した『枕草子』底本は、池田亀鑑が校訂した北村季吟『春曙抄』である。明らかにAの示した「池田亀鑑、岸上慎一、秋山虔の校注本」ではない。厳密に言うと、周作人が翻訳した『枕草子』の底本は、北村季吟の『春曙抄』より、池田亀鑑校訂した『春曙抄』であろう。なぜかと言うと、総合段数「三〇五」段は北村季吟の分類ではなく、池田亀鑑の独自の分類からである。

またAの年次の「一九六五年十月」の表記についてとAとBの署名が違うことは、ここでBの編集者のB跋文を参照して解明したい。漢字の表記は日本語に直した。

B跋文（周作人訳『枕草子』（北京：中国对外翻译出版公司 二〇〇二））

一九八八年九月、人民文学出版社將其与王以铸所訳『徒然草』合刊爲『日本古代随筆選』一書。訳者家属保存之『枕草子』訳稿、編爲「第一分」、「第二分」至「第八分」、後附「卷首目錄」、其中一至六分写「京文」紅色横格稿紙上、七、八分与目錄写在「崇文」綠色横格稿紙上、均爲每頁二十行、每行二十字、計正文六百六十五頁、目錄二十頁。与印本相比較、後者訳文、注釈改動之处頗多。此次重新出版、一律依照原稿付印。

（一九八八年九月、人民文学出版社は『枕草子』と王以铸が訳した『徒然草』を合わせて『日本古代随筆選』として一つの本を刊行した。訳者の家族が保存した『枕草子』の翻訳原稿は、「第一分」、「第二分」から「第八分」までに分けている。後に「卷首目錄」を附している。その中の「第一分」から「第六分」までには、赤色「京

文」の横線の原稿用紙に書かれている、第七分も第八分もと目録は緑色「崇文」横線の原稿用紙に書かれている。いずれも毎頁に二十行、毎行二十字、合計本文は六六五頁であり、目録は二十頁である。印本と比較して、後者（人民文学出版社・稿者注）の訳文、注釈は改めて変更したところが頗る多い。今度の改めて出版は、すべて原稿に基づいて付印した。）

止庵

二〇〇〇年十一月七日

（四六〇頁）

止庵は、初めて単行本として、周作人訳した『枕草子』を出版した人物である。また注目したいことは、Bの止庵は、周作人の子孫から保存された周作人の翻訳原稿に基づいて編集した周作人の訳文である。

次に、署名と年次について、当時、中国政府の規則があり、訳文の署名は「周作人」よりBのような「周启明」の署名は相応しい。また年次について、周作人は、一九六四年七月三日に自らの年譜の中で、すでに完訳『枕草子』を出版社に提出したという事実から見ると、明らかにAの「一九六五年十月」の年次は「臨機応変」に記した年次しか考えられない。翌年（一九六六）年から「文化大革命」が発生したので、だからこそ周作人の翻訳した『枕草子』が出版されなかったことは言わずとも誰でも納得できるだろう。

しかし、問題は残されている。それはなぜAが「依据池田亀鑑、岸上慎二、秋山虔的校注本」と明示していたのか。しかも、ここだけでなく、Aの『日本古代随筆選』（人民文学出版社 一九八八）の第二頁の中で、次のような目立つ標記をしていることは、なぜであろう。ゴシックの字体は稿者が付けた。

清少納言

枕草子

根拠岩波書店『日本古典文学大系』第19巻、1958年版訳出

この標記は、確かに「池田亀鑑、岸上慎二、秋山虔的校注本」と合致している。Aの『日本古代随筆選』の人民文学出版社は、周作人訳『枕草子』の中で前後に呼応した「日本古典文学大系『枕草子』」という表現について、一つ考えられる理由は、周作人が翻訳した『枕草子』の底本が、日本古典文学大系『枕草子』であることを強調したのではないだろうか。もしこの推測が正しいとすれば、周作人が翻訳した『枕草子』の底本は出版社の依頼と違っていたと考えることが可能であろう。この点を續いて追及してみたい。

五 出版社の依頼と周作人の翻訳の「食い違い」

人民文学出版社は、どのような『枕草子』の底本を、周作人に依頼したのか。いつ、だが、どこで周作人に頼んだのか。これらの疑問点を解明しなければ前に進まない。

近年、新たな周作人日記が部分的に公開された。それは『中国現代文学研究叢刊』（月刊）誌、二〇一八年第四期（総第二二五期）の中で、「周作人史料与研究」の項目に、周吉宜が整理した「周作人1959年日記」が公表である。この日記は極めて重要な文献と思われる。特に周作人が『枕草子』を翻訳する経緯が見える。なぜなら、一九五九年は、ちょうど人民文学出版社が明記した一九五八年の日本古典文学大系『枕草子』が、出版され二年目である。つまり人民文学出版社は新しい權威的な日本古典文学大系の『枕草子』を、翻訳の底本として周作人に依頼したと考えら

れる。いずれにせよ、周作人が一九五九年の日記の中で、『枕草子』の翻訳することを記録すべきであろう。さつそく「周作人1959年日記」を確認してみたい。

確かに人民文学出版社の依頼人たちは、最初に周作人宅に訪れた日は、一九五九年一月十四日であった。この日、周作人が日記の中で次のように記録している。引用文の表記は中国語の簡略字にした。太字は稿者が付けた。日本語の意味を「()」中に付けた。

一月十四日 阴、晨另十度。上午译书。人・文・社二人来接洽译日文古典事、允考虑『竹取』及『枕草纸』。(一月十四日、曇り、朝の温度は十度、午前は本を訳す。人民文学出版社の二人が、日本古典文学の翻訳することを相談に来了。『竹取物語』と『枕草子』の翻訳を考慮した。)

まずは日記の太字に注目したい。このような「人・文・社」「日文古典」「竹取」らの省略した表現は、文脈から見れば、間違いなくそれぞれの「人民文学出版社」、「日本古典文学」、「竹取物語」となるだろう。人民文学出版社の二人は誰だろうか。周作人の日記の中でははっきり書いてこなかった。前述したように、周作人本人が作った翻訳に関する日本古典文学の一覧の中では、『竹取物語』の訳書は見えないことから、一九五九年一月十四日に人民文学出版社の依頼人たちは周作人との交渉した結果、『竹取物語』の翻訳ではなく、『枕草子』の翻訳に決定したと理解される。そして、二日後、人民文学出版社から翻訳するために、周作人に『枕草子』底本が送られてきたのである。この日、周作人が日記の中で次のように書いてある。

十七日 晴，另十四度。上午译书，至下午初稿已了。得人文社信，寄来『枕草纸』三本一部、不拟翻译。⁽¹⁶⁾（十七日、晴れ、気温は十四度、午前から午後まで本を訳し、初稿を完成した。人民文学出版社からの手紙と『枕草子』「三巻本」一部が届いた。翻訳するつもりはない。）

右の太字の「三本」は興味深いところである。前に説明した「人文社」と同じように、これも周作人の省略した独特な表現である。文脈から見ると、この「三本」の意味は『枕草子』諸伝本の「三卷本」の省略した表現としか考えられない。当然、『枕草子』に関する「三卷本」の概念は、周作人は知っている。なぜなら、周作人が翻訳した『枕草子』の注釈の中では、自ら「三卷本」と記したことが見えるからである。この点から見ると、一九五九年一月十七日、周作人のところに届いた『枕草子』は「三卷本」であるということ間違いない。

では、この「三卷本」は具体的にどのような『枕草子』であろうか。周作人ははつきり書いてないが、後に人民文学出版社から強調した日本古典文学大系の『枕草子』と一致している。なぜかと言うと、日本古典文学大系『枕草子』『紫式部日記』と合本、池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔が校注（岩波書店）の底本は、三卷本系統本である。この点について、日本古典文学大系『枕草子』の「凡例」と「解説」の中で確認することができる。

まず「凡例」では、底本は「岩瀬文庫蔵」と明記、また「解説」では、「三卷本」の書名について、次のように述べている。

三卷本のもっとも正しい伝来をしていると認められる。陽明文庫蔵本、勸修寺家蔵本、ともに「清少納言枕草子」であり、岩瀬文庫蔵本には「枕草紙」と外題にある

（五頁）

ここまでの考察から明らかにしたのは、一九五九年一月十四日、人民文学出版社の二人が周作人宅を訪ねて、日本古典文学の翻訳を依頼した。周作人が『竹取物語』かそれとも『枕草子』かと応諾した。そして一九五九年一月十七日に、人民文学出版社から送った日本古典文学大系『枕草子』が周作人のところに届いた。ところが、三卷本である『枕草子』に対して、周作人は翻訳する気分がなかった。ということである。

ところが、すでに人民文学出版社から前払い原稿料を頂いているので、『枕草子』を翻訳しなければならない。

いつから周作人が『枕草子』の翻訳が開始したのか。「周作人1959年日記」によつて、ほぼ十カ月に近い、周作人は改めて『枕草子』を翻訳することを日記の中で書いた。それは次の日記である。太字は稿者が付けた。

十月三十日 晴、晨四度。上午往街寄静子信，文燕堂信。译书，下午成第一章。拟改译《枕草子》。丰一自南苑回家。⁽¹⁷⁾

(十月三十日、晴れ、朝の気温は四度である。午前、町へ行つて静子に手紙を送つて、文燕堂の手紙を送つた。本を訳す、午後、第一章ができた。改めて『枕草子』を翻訳するつもり。豊一は南苑から帰つた。)

ここで十分注意して頂きたいことは、太字に付けた「改译」という表現である。つまり別な『枕草子』を翻訳するつもりということである。具体的にどのような『枕草子』を翻訳したのか。周作人が日記の中で明記していなかったが、一九九〇年出版された単行本『枕草子』の周作人が書いた「清少納言について」によると、周作人が改めて訳した『枕草子』は北村季吟『春曙抄』と言っているが、本稿の考察により、厳密に章段数から言うと、周作人が改めて訳した池田亀鑑校訂した北村季吟『春曙抄』であるということがもつとも相応しいであろう。周知のごとく、『春曙抄』本文の系統は三巻本ではなく、能因本系統本である。

以上のように、人民文学出版社の二人が日本古典文学の翻訳について周作人の自宅を訪れて来た。周作人が人民文学出版社から依頼された日本古典文学大系の三巻本である『枕草子』の翻訳を拒否し、後に改めて能因本である池田亀鑑校訂した北村季吟『春曙抄』を翻訳したことを明らかにした。

しかし残念ながら、周作人が翻訳した『枕草子』は、人民文学出版社はすぐに出版されなかった。考えられる原因と理由としては、出版社の依頼と訳者の意思の食い違いの結果ではないであろうか。

では、当時、人民文学出版社の担当者が誰だろう。

興味深いことは、文潔若という方が「晩年の周作人」の中で、次のように述べている。

一九五二年八月以来、人民文学出版社は周作人にギリシャと日本の古典文学の翻訳を委嘱していた。五八年十一月、私は社の外国文学編集部から日本文学関係の集稿と編集の責任者に指名され、その結果、彼と銭稻孫（せんとうそん）の兩人に余人にはできない日本の古典文学作品の翻訳をさせるという特殊任務をも、あわせ引き継ぐことになったのだった。当時彼らは、出版社にとっては、いわば系列外の特約翻訳者であつた。以後七年の間に私が周作人との間で手掛けたのは、『石川啄木詩歌集』『浮世床』『枕草子』『平家物語』の四点、今はその全部が本になっている。（中略）

周作人の訳した『枕草子』は、王以鏐（おういちろう）訳『徒然草』と一冊に併せて『日本古代随筆選』の書名で一九八八年に、また『浮世床』と彼自身の改訳を経た『浮世風呂』も、『平家物語』や『日本古代随筆選』と同じく『日本文学叢書』の一冊として一九八九年に、いずれも周作人の名を冠して出版された。彼の生前渴望しながら叶えられなかったことが、やっと実現したわけである。⁽¹⁸⁾

ということは、一九五九年一月十四日、周作人の自宅を訪れた人民文学出版社の二人のうち、一人は文潔若であることが分かった。また一九八八年、人民文学出版社から「周作人」の名前を署名したことも分かった。この二点から連想して、人民文学出版社から明記した「一九六五年」の年次も「根据岩波書店『日本古典文学大系』第19巻、1958年版訳出」も、責任者である文潔若との関係ないとは言えないだろう。要するに、当時の責任者である文潔若が、依頼から出版まで、周作人の翻訳した『枕草子』の底本は「日本古典文学大系『枕草子』」であるという宗旨を変えてなかったのである。しかし明らかにしたように、実際に周作人が翻訳した『枕草子』の底本は三巻本ではな

く、能因本系統本文である。このような周作人の食い違う翻訳に対して、文潔若が出版しなかったのが原因ではないだろうか。

ところが、文潔若は回想文の最後のところに、周作人の著訳は出版されてなかった原因について、次のように注釈している。

（原注）一九六三年に張夢麟（日本文学研究家、編集者）から聞いて話では、周作人が関係方面に手紙を送って、著訳書に本名を使う権利の回復を求めたのに対し、上部は『光明日報』紙上に自己批判を発表して社会的な諒解を得るよう促したが、彼の書いてきた文章は自己弁護に終始していたために、結局発表されなかったのだそうである。⁽¹⁹⁾

右の注釈は、周作人の翻訳した『枕草子』が出版されなかった理由にならない。なぜかと言うと、当時の周作人本人が署名した名前は「周作人」ではなく、「周启明」だからである。またもし右の注釈が周作人の訳した『枕草子』を出版しなかった原因だとしたら、文潔若が周作人の食い違う翻訳の真相を知らなかったと理解される。もし本当に文潔若が周作人の食い違う翻訳の真相を知らなかったことが真実としたら、文潔若の次のような回想文と矛盾になる。

周作人の訳稿についても、私はかならず原文を探して引き合わせることにしてはいたが、但しこの場合はあくまでも勉強のため。⁽²⁰⁾

右の記録は真実としたら、周作人が訳した『春曙抄』の原稿と最初に文潔若が依頼した日本古典文学大系『枕草子』底本の原文と合わないはずである。いわゆる系統が違うから、前者は能因本系統本文、後者は三卷本文である。

ここまで述べたことをまとめて言うくと、七十五歳を超えた有名な文化人である周作人が人民文学出版社の日本文学

関係の集稿と編集の責任者である文潔若の話を聞かず、先に前払い原稿料を貰って、完成すべき任務として、勝手に我儘で食い違う翻訳を提出したが、いくら立派な翻訳としても、責任者が出版しなかった場合、周作人本人の責任がまったくないとは言えないだろう。

なぜ周作人は三巻本『枕草子』を拒否したのか。この問題は今後の課題と考えたいが、次の節に『枕草子』を完訳したのに、出版されてこなかったことを、如何に周作人にとって反映したのか、また『枕草子』を翻訳する間に、訳者の生活の実態について、新しい資料から照合してみたい。

六 周作人の翻訳と生活の実態

およそすべての作者や訳者は、何より自らの創作した作品と翻訳した作品を出版したいという気持ちがあるだろう。周作人はその例外とは言えない。周作人は一月に完訳した『枕草子』について、翌月、日本の友人安藤更生の手紙の中で、『枕草子』を翻訳したことについて、次のように一言報告している。

周作人↓安藤更生 1961年2月4日

拜啓 十七日手書拝見

枕草子現已草率譯了、

安藤更生先生 二月四日 周作人⁽²⁾

ここで注目したいことは、太字の「草率」の表現である。文字の通り、「草率」の意味には、仕事などのやり方が、いい加減であること、またぞんざいであること。つまりそれはぞんざいな翻訳であるということを表していると読め

るが、周作人の謙虚な言い方とも取れる。いずれにせよ、『枕草子』に対して翻訳の態度の本音とも考える。なぜかと言うと、前払い原稿料を貰ってから任務を完成しなければならぬ背景があるからである。つまり『枕草子』を翻訳することはしかたない、出版社から頼まれた仕事であり、自らの生きる生活費の為である。この点については、周作人と香港の友人鮑耀明の間の書簡にも見える。

一九六一年四月二十五日來信

耀明先生…

(前略)

枕草子雖有全譯、但此乃係稻梁之謀、覺得甚是粗糙。且稿擱在公家、亦未卜何時得以出世也。⁽²²⁾

(枕草子の全訳があるけれども、あれは生活費を稼ぐためである。極めて雑な訳と思っている。しかも原稿は政府の出版社に放置され、何時出版できるのかさっぱり分からない。)

やはり周作人は自ら翻訳した『枕草子』が気になっている。しかし出版社から出版する返事はずっとなかった。訳者にとって周作人の辛い心情は誰でも分かるだろう。また周作人は後に『知堂回想録』の中でも、『枕草子』の翻訳について、次のように述べている。

一九六〇年起手翻訳『枕之草紙』、這部平安時代女流作家的隨筆太是有名了、本來是不敢嘗試、後來却勉強擔負下來了、却是始終覺得不滿意、覺得是超過自己的力量的工作。⁽²³⁾

(一九六〇年から『枕草子』の翻訳を始めた。この平安時代女流作家の隨筆はあまりにも有名で、本来では翻訳して試す勇気がなく、後に無理に担当してきたのである。やはり最初から最後まで満足できず、自分の能力を超えた仕事だと思っていた。)

右の回想文から見ると、訳者は心掛けて翻訳した『枕草子』の事が忘れられず、まだ出版されていないとしても、翻訳した『枕草子』に対する心情が反映されている。一九六〇年代、周作人はどのような生活の状況で『枕草子』を翻訳したのか。

かつて劉岸偉は次のように述べている。

周作人の『枕草子』翻訳は、一九六〇年代の初頭に行われたもので、家庭の内外とも比較的平穏な時期と重なっている。一九六〇年一月より、原稿料の前払いとして毎月に四百元を人民文学出版社から支給されることになった。物質不足で、しばしば香港の友人に食べ物を送ってもらうのもこの時期であつたが、生活も気持ちも相対的に安定していた。⁽²⁴⁾

これは劉岸偉の理想的な感想であろう。しばしば友人へ食べ物を求める生活は、どうしても「落ち着いた」生活とは言えないだろう。むしろ不安と圧力で切迫していた生活の中で一所懸命に奮闘していたのだろう。

例えば、鮑耀明が編集した『周作人晩年書信』（香港真文化出版 一九九七）を見ると、一九六〇年代の周作人の生活実態が見える。鮑耀明は商売人であるのでお金に余裕があり、周作人の要求を百パーセント満足させている。鮑耀明は周作人にサイン、写真、また魯迅の字蹟を求めている。周作人の『枕草子』翻訳の開始と完成の間に、前述した近年で公開された日記と香港及び日本の友人の書簡を合わせて、実際の周作人の生活状況と翻訳する実態が次のようになる。日本語の意味を「（）」に付けた。

一九五九年十一月十一日（周作人一九五九年日記）

下午勉強译书，成《枕草子》一纸，今日不过是起头试译耳。

（午後、無理に本を訳す、一枚『枕草子』になり、ただ今日は始めて試す訳だけだ。）

一九五九年十一月二十六日（周作人1959年日記）

徐女士来访信子，饋魚、米。晚食魚，甚佳，年来仅见也。

（徐様が信子を会うに来て、魚と米を頂いた。当晚、今年初めて魚を食べた、非常に良かった。）

一九五九年十二月十六日（周作人1959年日記）

上午中国书店来二人收购中文古书，售去八十部，共百六十五元，两共售得三百元。

（午前、中国書店の二人が漢文古本を買い集め来た、八十部を売った、計百六十五元、両方全部三百元。）

一九六〇年六月三日（周作人・鮑耀明書簡）

欲請費神買鹽煎餅一盒寄下、

（六月三日、〆面倒ですがひと箱の塩煎餅を送って下さい。）

一九六〇年六月十八日（周作人・鮑耀明書簡）

得鮑耀明十三日信云已寄出鹽煎餅一罐。

（十三日、鮑耀明の手紙が届いた、すでに一罐の塩煎餅を送ってくれた。）

一九六〇年六月二十六日（周作人・鮑耀明書簡）

得鮑耀明寄鹽煎餅一盒。

（二十六日、鮑耀明から送ってきたひと箱の煎餅を受けた。）

一九六〇年七月一日（周作人・鮑耀明書簡）

擬工作因不快而止、似病又發作也。

（仕事のつもりが不愉快で止めた、なんとなく病気の発作が起きるらしい。）

一九六〇年七月三日（周作人・鮑耀明書簡）

今日又不快、未工作。

（今日も又不愉快で、仕事をしなかった）

一九六〇年八月十九日（周作人・鮑耀明書簡）

中國書店王姓來看舊書，售去百漢碑冊等英文及新刊雜書，估價百元。

（中國書店の王さんが古本を見に来た。百冊の漢碑冊などの英文書及び新刊の雜書を売った、見積百元。）

一九六〇年十二月十日（周作人・鮑耀明書簡）

前承賜肉体的食糧、現欲更賜予精神的食糧也。

（先日、肉体の食糧を頂きました。今度（²⁵）面倒ですが精神の食糧を頂きたいです）

一九六一年二月四日（周作人・安藤更生書簡）

枕草子現已草率譯了、

（現在、枕草子のぞんざいな訳を完了しました。）

右のように、明らかにした一九五九年十一月十一日から一九六一年二月四日までの期間は、周作人の『枕草子』の翻訳の期間である。およそ一年三ヵ月近い期間で、しかも七十四歳から、七十五歳、七十六歳にかけての老人で、日本古典の中の古典である『枕草子』（能因本）を完訳した。優れた業績は言うまでもないが、日々一枚か二枚かくらいで、しかも毛筆で書き翻訳の大変な作業を想像することは難しくない。もっと大変なことは、右のように、体調を崩す不安や圧迫な苦しい生活である。おそらく知識人にとっては、自ら収蔵された書籍を売ることが辛いことだろう。それは仕方ない少しでもお金が欲しい。しかしまた新しい書籍を欲しがって、友人に「精神的食糧」をお願いするし

かない。例えば、

一九六〇年十二月十三日（周作人・鮑耀明書簡）

夏目伸六一書、頃已蒙北大友人代爲借出、得以看到、所以已可不必買了、獅子文六之作則仍乞「取寄」⁽²⁶⁾

（夏目伸六の本は、今頃すでに北京大学の友人から借りられ、読めることができたので、だから買うことが必要なくなりました。獅子文六の作品は相変わらずまたお願いいたします「取り寄せ」）

何より手紙や書簡などの文献は最も信憑性が高いと言えるだろう。周作人が鮑耀明に送った手紙の中には、物を求める時に、必ず「請」や「賜」や「乞」のような文字を使っている。これらの言葉の意味には、物乞いイメージがないとは言えないだろう。まさに錢理群が分析したように、当時の周作人にとって最も不安なことは経済的な圧力であったようである。錢理群は次のように述べている。

从1961年底开始，周作人把一直秘不视人的《日记》也拿出来卖了。⁽²⁷⁾

（一九六一年末から、周作人はずつと密かに持っていた人に見せない『日記』を出して売ることになった。）

錢理群が言われた通り、「魯迅博物館は、一千八百円で周作人の日記を買上げ、「文物」として保存した」⁽²⁸⁾

このような生活状況の中で、周作人が任務を完成しなければならない三卷本『枕草子』底本を変えて、能因本である『枕草子』を完訳したのが、出版されなかった。無論、前払い原稿料を貰っている周作人は我儘で出版社から頼まれた底本を勝手に変えたことに過失がないとは言えないが、しかも旧知識人のもったいぶる様子で責任者である文潔若に待遇した。かつて責任者である文潔若が周作人の印象は次のように述べている。「周作人は時として人に傲慢な印象を与えることがあった」⁽²⁹⁾もし当時の周作人は文潔若に優しくしていたら、『枕草子』を早めに出版されたかもしれない。

七 おわりに

以上、周作人が『枕草子』を翻訳する経緯と実態を考察してきた。まず、周作人は中国現代文化名人である魯迅の弟として、その背景を遡ってみた。特に周作人から中国政府の要人に送った手紙を部分的に紹介した。特別文化人として、中国政府から周作人に日本古典文学を翻訳する仕事を与えた背景を述べた。そして、一九五一年人民文学出版社が成立、周作人が毎月前払い翻訳料を受け取って、多くの翻訳の業績を積み重ねられてきた。ところが、一九五九年、人民文学出版社から日本古典文学大系『枕草子』翻訳を依頼したが、周作人は拒否した。そして、前払い翻訳料を頂いたため、翻訳しなければならないから、北村季吟『春曙抄』（池田亀鑑校訂）を変えて翻訳したが、すぐに出版されなかった。その原因と理由について、近年公開された周作人と友人（香港、日本）の手紙と書簡から、周作人が送った翻訳の原稿が、出版社から依頼した日本古典文学大系『枕草子』底本と食い違っていたことを明らかにした。また当時の余裕のない周作人の『枕草子』翻訳の生活と実態を明らかにした。

〔注〕

- （１）『魯迅全集』第十六卷（附集）「魯迅著訳年表」（人民文学出版社 一九八二）七頁。
- （２）『魯迅全集』第十六卷（附集）「魯迅著訳年表」（人民文学出版社 一九八二）八頁。
- （３）『魯迅全集』第十六卷（附集）「魯迅著訳年表」（人民文学出版社 一九八二）一一頁。
- （４）『魯迅全集』第十六卷（附集）「魯迅著訳年表」（人民文学出版社 一九八二）一二頁。

- (5) 張菊香、張鉄榮編著『周作人年譜』（天津人民出版社 二〇〇〇）などを参照した。
- (6) 『魯迅全集』第十六卷（附集）「魯迅著訳年表」（人民文学出版社 一九八一）一三頁。
- (7) 伊藤徳也「周作人・魯迅をむぐる日中文化交流」『岩波講座「帝国」日本の学知』第五卷 東アジアの文学・言語空間「責任編集」藤井省三（岩波書店 二〇〇六）六頁。
- (8) 周作人「歌咏兒童的文学」『宇宙風』「晨报附刊」中華民國十二年二月二十一日・日曜日（影印）、（人民文学出版社 一九八二）第三版。
- (9) 程光燁編『周作人評説80年』（中国華僑出版社 一九九九）三八頁。
- (10) 同（5）。
- (11) 同（5）。
- (12) 木山英雄「周作人「対日協力」の顛末」（岩波書店 二〇〇四）三九三〜四〇四頁。
- (13) 同（5）。
- (14) 成仲恩「周作人自訂年譜及戦後訳著書目」『南北極』第五十六期（香港 一九七五年）※タイトルと本文の漢字はすべて現代日本語の漢字に表記した。五〇〜五一頁。
- (15) 周吉宜整理「周作人1959年日記」『中国現代文学研究叢刊（月刊）』第四期、総第二三五期（中国現代文学研究叢刊編集部 二〇一八）八〇頁。
- (16) 同（15）八一頁。
- (17) 同（15）一〇四頁。
- (18) 同（12）四七三〜四七五頁。

- (19) 同 (12) 四八五頁。
- (20) 同 (12) 四七六頁。
- (21) 徳泉さち「周作人・安藤更生往来書簡（1）」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第18号（早稲田大学會津八一記念博物館 二〇一七）三〇～四〇頁。
- (22) 鮑耀明『周作人晚年書信』（香港真文化出版 一九九七）四六〇頁。
- (23) 周作人『知堂回想錄』下冊（香港三育圖書文具公司 一九七〇）六三七頁。
- (24) 劉岸偉『周作人伝——ある知日派文人の精神史——』（ミネルヴァ書房 二〇〇一）四七〇頁。
- (25) 同 (21) と (22) を参照。
- (26) 同 (22) 二三頁。
- (27) 錢理群『周作人伝』（北京十月文芸出版社 一九九〇）五二四～五二七頁。
- (28) 同 (12) 三二八頁。
- (29) 同 (12) 四七七頁。

Dream of an antiquarian book collector

YAMAMOTO Kazuaki

TANAKA Jutaro, who was famous for his research on "Makura no soshi" (the Pillow Book), was also famous as an antiquarian book collector. The main items in his collection are now included in "Shun-sho Bunko" at Soai University. If buying and sometimes selling old books is what makes a person a full-fledged book collector, Tanaka was one of those book collectors. There is a memo written by TANAKA in the 1970s. Looking at them, we can confirm that he had other ideas for his work besides his study of "Makura no soshi". I am concerned that these materials will be buried, so I would like to disclose them and state what I know about the notes.

The History and Reality of Zhou Zuoren's Translation of the *Pillow Book* Unpublished

ZHANG Peihua

Lu Xun, a world-famous modern Chinese writer, is Zhou Shuren (1881-1936). Zhou Zuoren (1885-1967) is Lu Xun's brother. This paper describes the Zhou brothers' relationship and how Zhou Zuoren became to translate Japanese classical literature. Zhou Zuoren had translated the *Pillow Book* (Makura no Sōshi), which the People's Literature Publishing House requested in 1959. Why wasn't it published at that time even though Zhou Zuoren had finished it on time? About this question, I would like to consider the reasons and actual situation according to the public Zhou Zuoren's diaries and his overseas friend's letters in recent years.